九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

オコヅク考、オゴメク考 ： 帚木巻の異文の解釈

白石, 良夫
文部科学省主任教科書調査官

https://doi.org/10.15017/8896

出版情報：語文研究. 102, pp.1-12, 2006-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

オコヅク考、オゴメク考

――帚木巻の異文の解釈――

白石良夫

のこりをいはせむとてさて〳〵をかしかりける女かなとすかい給を心はえなからはなのわたりおこつきてかたりなす

一　問題の所在

源氏物語帚木巻、例の雨夜の品定めの段。式部丞のかたる体験談を、源氏や頭中将がそのさきを催促して、式部丞が話をつづけようとする場面である。右の引用には、『源氏物語大成校異篇』の本文をそのままの表記で掲げた。現代語訳すれば、

残りを言わせようとして、源氏たちが「さてもさてもおもしろい女だな」とおだてなさる。おだてとはわかっていながら、式部丞は鼻のあたり□□□□□語るのであった。

となる。□□□□□で示した箇所は本文「おこつきて」にあたり、ここにいかなる現代語を充当するか、本稿はそれを検討することによって、副題に示した問題を提起する。

源氏学では周知のことだが、『源氏物語大成校異篇』帚木巻の主本文は、底本が大島雅太郎旧蔵本すなわち「大島本」と通称されるものである（現在、古代学会蔵）。校異篇は、その表記に忠実に翻印してある。本稿が問題とする「オコヅク」も、冒頭引用の「おこつきて」という表記が大島本の姿である。

なお、標題および以下の叙述における片仮名表記、オコヅクもオゴメクも源氏物語が成立した時代の発音とされるもの

である、ということをあらかじめ断っておきたい。西暦一〇〇〇年の時点の日本語ではオとヲが区別されなくなって、オと発音されていたといわれ、したがって、これ以後、「お」と「を」の表記は混乱した。ヅとズは現代では同一に発音されるが、このころはまだ区別が保たれていた。

二　古典本文の校訂と仮名表記のありかた

大島本は、藤原定家の校訂した、いわゆる青表紙本系の有力な伝本であって、その仮名遣は、したがって定家仮名遣によっていると見なしていい。定家仮名遣は、文学作品の定本作りのために定家がたてた、個人的な（誤解をおそれずあえていえば、便宜的な）規準であった。とくに「お」「を」は定家の時代のアクセントの高低による書き分けであったから、大島本のこの部分は、源氏物語のオリジナルな表記を反映するものではない。ましてや、混乱する以前の仮名表記を規準とする「歴史的仮名遣」とも、まったく無縁である。

したがって、後世の写本でしか伝わらない古典文学作品（とくに定家以前成立の）を校訂するばあい、国語史的に根拠をもたない定家仮名遣は採用しないのが普通であり、また採用しないことのほうが理にかなっている。では、なにをもって表記のよりどころにすべきかといえば、今日のところ、歴史的仮名遣によるのが無難と思われる。こういう消極的な物言いをするのは、かぎりなく作品のオリジナルに近づくことをもって理想とする近代国文学の思想からいえば、歴史的仮名遣も、所詮、次善の策にとどまるからである。

「歴史的仮名遣」は、平仮名・片仮名が発生したときから音韻変化によって表記に乱れがおこるまでの、きわめて短い期間（西暦でいえばほぼ九世紀、遅く見積もっても一〇世紀前半まで）の仮名表記の実態を再現して、それを表記の規範にしようとするものである。この事業つまり実態を再現することはいまだ達成されていないが、かりに完璧に再現することに成功したとしても、それをもって作品の仮名表記のオリジナルまでが再現できたといえるのは、九世紀から一〇世紀前半までに成立した作品に限られる。源氏物語が西暦一〇〇〇年前後の成立というのは文学史の常識である。源氏の本文を歴史的仮名遣で表記することが次善の策だと言ったのは、そういう意味である。

ちなみに言えば、これは、源氏物語を現代仮名遣で表記することも可能であり、それがけっして非合理的でないということをも意味している。そんなの認められない、というのは生理の問題、好みの問題にすぎない。

右のことは、「仮名遣」についての基礎学習のおさらいであって、とりたててわたしの独創があるわけではない。が、本稿を叙述するにあたって、仮名遣とテキストクリティークにたいするわたしの立場を明確にしておきたいという思いがあった。でないと、不要な食い違いや誤解を生むおそれがあると考えたからである。わたしの立場とは、どこまでも「仮名遣」ないし「歴史的仮名遣」の常識にのっとるものである、ということを明言しておく。

三　オコヅクの仮名遣と語義

問題の「オコヅキテ」について、戦後の一般的な注釈書の校訂本文とその解釈はつぎのようである。

	本文	語釈・現代語訳
朝日全書	をこづきて	鼻の辺をぴくつかせながら。得意の様子。
岩波大系	おこづきて	鼻の辺を調子に乗ってはずまして。
玉上評釈	をこづきて	「烏滸づく」〈ばか、どうけめく〉。河内本・湖月抄本の「をこめきて」も同義。
		［現代語訳］鼻のあたりに得意の色をただよわせて。
小学館全集	をこつきて	「烏滸つく」で、おろかにみえる。ここは、演技である。
		［現代語訳］鼻のあたりにおどけた表情を浮かべて。
新潮集成	をこづきて	［現代語訳］うごめかせて。
岩波新大系	をこづきて	鼻の辺りをおどけて見せてあえて語る、の意か。

いずれの校訂本も「おこつきて」と表記した青表紙本系の善本を底本とする。岩波新大系以外は仮名表記を歴史的仮名遣に改めるという方針。岩波新大系も歴史的仮名遣を傍記するので、校訂者の判断した仮名のほうを示しておいた。清濁の区別をしない古典書写本に濁点を補うのは、こんにち普通におこなわれる本文校訂の慣習である。小学館全集に濁点がないのは、「烏滸」＋「つく」の連濁する前の形だとの判断であろう。それなら、これは許容範囲を出るものではない。

なお、岩波新大系は底本の大島本の仮名表記に忠実に翻刻する方針をとっているが、この翻刻方針は、源氏物語成立から二〇〇年後に個人的便宜的につくられた定家仮名遣を残す

だけの意味しかもたない。

四　オコヅクを「をこづく」と表記する所以

ところで、歴史的仮名遣は、原則として一〇世紀前半以前の仮名表記の実態（用例）から帰納的にみちびきだす。それに適合する用例のないばあい、すなわち表記の実態そのものが不明なときは、語源を推定して理論的に演繹するという方法をとる。とはいっても、日本語の語源説はまさに推定の域をでないことが多く、また語源不明な語彙もあって、異なった語源が設定されると、複数の正しかるべき仮名遣が主張されることもある。

「オコヅク」なる語も、その例に当てはまるであろう。一語としてのオコヅクは、源氏物語のさきの例が最古であって、歴史的仮名遣考定に使用できる用例はない。表記の実態が不明であるから、用例からの帰納はできず、したがって、語義・語源を手がかりにしてこの語の仮名遣を考定せざるをえない。

諸注釈のうち、語源に言及しているのは玉上評釈と小学館全集であり、ともにおなじ語源説をとっている。「烏滸（痴）」は奈良時代の文献に用例があり、そこから帰納されるこれの仮名遣は「をこ」である。したがって、玉上評釈・小学館全集の語源説を正しいとするなら、オコヅクの歴史的仮名遣は「をこづく」となる。これが、語源を推定して正しかるべき仮名遣を演繹するということである。だから、底本の「お」を「を」としたのは、歴史的仮名遣考定の原理と辻褄があう。だが、玉上評釈の「ばか、どうけめく」の語注と「得意の色をただよわせる」という現代語訳とは、いささか結び付きがよろしくないように感じるのは、わたしだけであろうか。ぴくつかせる動作も「得意の様子」と読み解けるように（朝日全書のごとく）、「得意の色云々」は、ことばそのものから引き出された語義ではなく、読み手が物語の状況を想像して、作中人物の心理を読み取ったにすぎない。

それはともかく、玉上評釈・小学館全集を基準にして、これとおなじ解釈をとることのはっきりしているのは、文末で断定を避けているけれども、岩波新大系である。岩波大系のは「烏滸づく」の意味をふくんでいるのかどうか曖昧である。もしその意味をふくんでいるとすれば仮名遣を誤っている。朝日全書はあきらかに「烏滸づく」から離れており、新潮集成にいたっては、「烏滸」＋「づく」の影も形もない現代語訳になっている。したがって、朝日全書・新潮集成の校訂本文「をこづきて」は、玉上評釈・小学館全集と同じ仮名遣ではあるが、それらとは異なった手続きからみちびかれたもの

であるということになる。が、それがどういう手続きの道筋であるかは、注釈は何もかたっていない。

これらの注釈のうち、校訂本文の仮名遣の由来が語釈・現代語訳から納得されるのは、玉上評釈・小学館全集・岩波新大系ということになる。繰り返しになってしつこいが、朝日全書・岩波大系・新潮集成については、本文仮名遣と語釈・現代語訳との繋がりは説明されておらず、したがって、なにを根拠に「をこづきて」「おこづきて」としたかは不明である。

五　辞書の「オコヅク」

現代の古語辞典における帚木巻の用例の扱いはどうなっているのか。

日本国語大辞典では、仮名遣は「をこづく（痴付）」で、「ばかみたいに見える、みっともなく見える」の語義の用例に帚木巻の語をつかう。これは小学館全集とおなじである。が、補注において、「文意からは、得意になって語る、誇らかに調子づいて語る意味ともとれる」ともしている。この辞書は、調子づく意を別項としてたて、その仮名遣を「おこづく」とするので、この補注のような解釈をとるとすれば、大島本とおなじ表記になる。

おなじ小学館でも古語大辞典になると、「をこづく（痴づく）」の項目をたてながらそこに帚木巻の用例はなく、「おこづく（漢字表記なし）」の項目に、ひくひく動かす、ぴくつかすの語義を設けて、その用例に帚木巻の本文をつかっている。ただし、これにも補注があり、ばかみたいに見えるの意に解することもできる（これだと表記は「をこづく」）、とする。

角川古語大辞典は、「をこづく（痴づく）」の見出しだが、「をこ」に接尾語「づく」が付いた語と明言しながら「おこづく」の表記も許容するがごとき記述で、日本国語大辞典・小学館古語大辞典が別項としてたてていた「おこづく」を、一つの項目にまとめている。この辞書では帚木巻の用例はつかわれていない。

なお、北山谿太『源氏物語辞典』は、帚木巻の例を表記「をこづく」とし、語義は「をこなる性状がそなわる。おかしき格好をなす」であるとする。

以上を、手もとのコンパクトな辞書もあわせて整理すると、つぎのようになる。――は、帚木巻の該当語を用例につかっていないことを示す。

	表記	語義
日本国語大辞典	をこづきて	ばかみたいに見える。 ［別解］得意がる、調子づく。 （「おこづきて」）
小学館古語大辞典	おこづきて	ひくひく動かす。 ［別解］ばかみたいに見える。 （「をこづきて」）
角川古語大辞典	——	——
北山源氏物語辞典	をこづきて	おかしな恰好をなす。
岩波古語辞典	をこづきて	おかしなさまをする。
新潮国語辞典	をこづきて	得意になる。

新潮国語辞典は見出しで「烏滸」の字をあてており、これは玉上評釈と同様の語源・解釈と見ていい。

六　語源「烏滸」＋「づく」を排除した場合

以上のように「烏滸（痴）」＋「づく」が語源だとすれば、正しかるべき仮名遣は「をこづく」である。これは歴史的仮名遣考定の原理にのっとっていることがはっきりしているのだから、揺れようはない。したがって、つぎに検討すべきは、そのほかの解釈とそれぞれの仮名遣ということになる。それをもう一度、整理してみる。

朝日全書	をこづきて	鼻の辺をぴくつかせながら。
新潮集成	をこづきて	（鼻のあたりを）うごめかせて。
岩波大系	おこづきて	鼻の辺を調子に乗ってはずまして。
日本国語大辞典（別解）	おこづきて	得意がる、調子づく。
小学館古語大辞典	おこづきて	ひくひく動かす。

日本国語大辞典（別解）の語釈の「得意がる、調子づく」をどう理解するかは難しいところである。が、岩波大系の「はずまして」が動かすという意を汲んでいるとみるなら、「をこづく」（烏滸）としない岩波大系とおなじ仮名遣の日本国語大辞典（別解）は、岩波大系と同様の解釈をしていると見なせる。それならば、これらの注釈書・辞書はどれも、帚木巻の当該箇所を同じ語義でもって読んでいることになる。にもかかわらず、仮名遣は、異なった正しかるべき仮名遣が想定されている。

何度もいうように、一〇世紀中頃以前に表記の実例のない語彙の仮名遣については、語源から推定する。のであるが、「烏滸」＋「づく」を拒否した右の注釈書・辞書は、語源にはいっさい触れるところがない。あるのは、文脈からの解釈らしきものだけである。たしかに、雨夜の品定めの段の「オコヅク」を「うごめかす（ぴくつかせる）」として読むのは、文脈のうえではきわめて自然である。だが、文脈にぴったり合うというだけで、オコヅクの語義が「うごめく（ぴくつく）」であるということにはならない。「烏滸づく」の意で読んでも、「うごめく」で読むよりちょっとだけ不自然という程度である。それになにより、オコヅクが「うごめく」と同義・同源であったとしても、それが仮名遣の決め手にならないこと、右の表に見るとおりである。

七　河内本本文
――「烏滸づく」を排除したときの先入主――

「烏滸づく」の意で読んでも極端に不自然でないということは、そのほかの語義でもって解釈しても不自然でない可能性を孕んでいる。入学試験の採点をしていて、出題者の想定した解答以外の解答に出くわして、それも正解とせざるをえない状況はよく経験する。本稿冒頭に引用した帚木巻の場面なら、「烏滸」＋「づく」を拒否した「オコヅク」について、それをも正解とせざるをえない別解はおそらく、かなりの数の候補が名乗りをあげるはずである。オコヅクの語感は、けっして「うごめく」だけを直感的に連想させるものではないからだ。いや、なんの先入観もなければ、オコヅクと「うごめく」は容易には結び付かないであろう。

「烏滸」＋「づく」を拒否しながら、「うごめく（ぴくつく）」の解答しか思いついておらず、にもかかわらず、その語義から判断したはずの仮名遣は相違している。ということは、これらの解答自体、さしたる自信と根拠があったわけではない、ということを匂わせている。「烏滸づく」の意を排除したうえで示し合わせたようにほぼ同じ語義「うごめく」で解釈するというのは、注釈者や辞書執筆者のあいだに共通する先入観があったとしか考えられない。では、それは何なのか。先に結論を言ってしまうことになるが、じつは、青表紙本とは異本の関係にある河内本系統の本文、それが先入主になっていたのだ、とわたしは考える。

これも源氏学の常識であるが、河内本とは源光行・親行父子によって校訂された本文のこと。一般に、青表紙本にくらべて杜撰な本文と見なされる。河内本の価値を一概にそう貶

めるのもどうかと思うが、今日ほとんど校訂本の底本につかわれないのは事実である。だが、かつては河内本のほうが流布していたといわれ、江戸時代になると、もっとも身近だった注釈書『湖月抄』にも河内本の本文が混じっている。この流布状況が、帚木巻の「オコヅク」を「うごめく」の意味に引き付けている、とわたしは考える。

八　孤例中の孤例「おごめく」の存在

河内本では、問題の箇所が「をこめきて」となっている。『湖月抄』もこの部分は河内本の本文を採用する。この表記が歴史的仮名遣と無縁なのは、もちろん青表紙本の場合とおなじである。この語は、『湖月抄』以来オゴメクと認識されていて、今日でもそれは変わらない。

青表紙本一辺倒の今日の校訂本では、当然このオゴメクなる語は本文にあらわれない。注釈で異文として触れられる程度で、それでもオゴメクそのものへの言及はない。しかも、この語の存在は、平安時代の文献からは、河内本帚木巻の該当箇所しか報告されていない。源氏物語やほかの仮名文学作品はもちろんのこと、非文学の文献からも、オゴメクがあったという報告はないのである。

時代をへだてて、あの徒然草七三段に、

人の言ひしままに、鼻のほどおごめきて言ふは、その人のそらごとにはあらず。

とあるのが源氏以外の唯一の例であるが、これはあきらかに帚木巻をふまえた表現である。兼好の読んだ源氏物語が河内本系であることを証明しても、平安時代にオゴメクなる語が実在したことを証明はしない。

オゴメクはただでさえ孤例であり、しかも河内本にしかないということは孤例中の孤例、というより、河内本が一般にいわれるように信頼に堪えない本文だとするなら、平安時代における存在さえもが怪しくなってくる、そんなたよりないことばであった。

だがしかし、古語オゴメクの存在感は、後世の人間にとっては大きかった。前述したように、河内本が青表紙本よりも流通していたらしいこと、とくに江戸期においては河内本の本文をもつ『湖月抄』で読まれたことなどによる。そして、後述するが、近世から近代にかけての代表的な辞書類にはたいていい、オゴメクの語が、源氏物語あるいは徒然草を典拠にして立項されている。『雅言集覧』など、オコヅクの語を原著者の石川雅望は「ヲ」にも「オ」にも採っておらず、中島広足がようやく補遺で古今著聞集の用例を加える程度。それ

にたいしてオゴメクは最初から堂々と掲げられてあった。これらのことがオゴメクの存在感の大きさを裏付け、さらにそのこと自体がこの語の存在感を強固にしているといえよう。孤例中の孤例であること、つまり典拠とするものが限られていることがかえってそれに拍車をかけているといったら、言い過ぎであろうか。

九　孤例ゆえの存在感

しかし、いかにオゴメクの存在感が大きかったとしても、右のような事情をもつ孤例の語彙であるという事実は、オコヅク以上に正しい歴史的仮名遣を考定するのが困難ということを意味する。はたして、国語調査委員会編『疑問仮名遣』（大正元～四年）にもこの語がとりあげられ、正しかるべき仮名遣の決めがたいことが指摘された。江戸時代においては、まず『倭訓栞』（谷川士清）が「をごめく」で立項しており、『雅言集覧』（石川雅望）も「をごめく」の表記を採用する。近代になっても『語学指南』（佐藤誠実）『ことばのその』（近藤真琴）『言海』（大槻文彦）『日本大辞林』（物集高見）『ことばの泉』（落合直文）など「をごめく」とするのが主流である。「おごめく」説はわずかに『類聚名物考』（山岡浚明）『俚言集覧』（太田全斎）くらいであった。

現行の古語辞典の主流は「おごめく」であるようである。こんにちでは、だから、「をごめく」のほうを空見出しにしたり、仮名遣については留保する旨の注記をほどしたりするのが普通となっている。

仮名遣は未解決であるが、語義はどの辞書も一致している。士清は「蠢をよむ。うごめくに同じ。微動也」と言い、士清らと異なる仮名遣をとなえる浚明も「うごめくに同じ。動を訓むなり」と言った。以来、今日まで、河内本源氏と徒然草の「オゴメク」は、「蠢」「蠢動」「微動」などの漢字をあてられて、うごめく、ぴくぴく動かすの意として読まれつづけてきた。

オゴメクとウゴメクとが音韻の交替形だというのは、直感的になんとなく納得させられる。したがって、語義に関しては一貫していて、揺れはない。「直感的」とか「なんとなく」は、われわれの研究の世界では禁句であるが、ここは意図して、あえてそのように言っておく。とにかく、「オゴメク＝ウゴメク」のこの公式にたいして、これまでこれといった異論は出されていない。この不動の語義が、源氏物語帚木巻の限定つきで、青表紙本「オコヅク」の、「烏滸づく」の意を排除したときの解釈に影響をあたえ、先入主になってしまっ

たと考えられる。ひとえにそれは、さきに言ったような、青表紙本よりも大きいオゴメクの存在感によってであった。この存在感が帚木巻の「オコヅク」までをも「うごめく」の意で読ませていたのである（朝日全書・新潮集成・岩波大系・日本国語大辞典別解・小学館古語大辞典）。

一〇　オゴメクに幻惑されたオコヅク

前節までの叙述を整理すれば、以下のようになろう。

源氏物語帚木巻の雨夜の品定めの段の問題の箇所の語は、青表紙本がオコヅク、河内本がオゴメクであった。

このうち、オコヅクの解釈には揺れがある。一方の解釈（「烏滸」＋「づく」）をとれば、その語源も納得されやすく、仮名遣も明白である。文意にも障害は生じない。それにひきかえ、他方の解釈（「うごめく」の意）だと、文意はより自然であるが、その仮名遣の根拠となるもの、つまり語源の面で明確でなく、げんに諸校訂本や辞書では仮名遣に異論がでている。語源がはっきりしないから、オコヅクと「うごめく」との意味上の接点も、いまひとつ曖昧さをぬぐえない。

オコヅクを「うごめく」の意だとはっきり解釈するのは、朝日全書・新潮集成・小学館古語大辞典である。だが、意味上の曖昧さが残り、語源もはっきりしないために正しかるべき仮名遣も不確定なこの解釈を、なぜこれらはとるのか。

河内本の「オゴメク」の存在に幻惑されたのだ、とわたしは考える。かれらの頭のなかで、目の前の青表紙本「オコヅク」が、孤例ゆえに存在感のつよい異本の河内本「オゴメク」に取って替わられ、直感的に納得される「オゴメク＝ウゴメク」の公式がはたらいて、オコヅクを「うごめく」意だとなんとなく解釈したのである。この混同は、すでに江戸期の辞書類から見られる。

一一　中古語「オゴメク」実在への疑問

ところで、わたしはここまでしばしば、オゴメクを孤例だと言ってきた。だが、はたしてそうであろうか。というより、わたしのなかでは、オゴメクなどという語が平安時代に存在したのだろうか、という疑問が生まれる。存在しなかったのならば、孤例ともいえない。おそらく存在しなかっただろうとわたしは思う。これはけっして、河内本の「をこめきて」が誤写であるとか後世語が紛れ込んだとか、すなわち河内本が使用に堪えない本文だなどと言いたいのではない。河内本は特段の珍しいことばを使ったのではなかったのだ。

これを「烏滸」に接尾語「めく」のついた「オコメク」（冗談めく、ふざける、ばかに見えるの意）と考えるなら、源氏物語にもいくつかの例が見つかるではないか。

ことぶきの乱りがはしき、をこめきたることも、ことごとしく取りなしたる、（源氏物語初音巻）

昔物語などに、をこめきて作りいでたる、物のたとひにこそはなりぬべかめれ。（源氏物語総角巻）

河内本帚木巻の「をこめきて」の「めく」も、これらとおなじ「～らしくなる」という意味をつくる接尾語と見なせば、実際の用例の多寡にかかわらず、そんなに珍しい語彙ではないということは容易に察しがつくであろう。青表紙本の「おこつきて」の「つく」も、「～らしくなる」という意味をつくる接尾語「づく」が「烏滸」に付いたものであった。つまり、源氏物語帚木巻の当該箇所の本文異同は、けっしてかけ離れた解釈を誘発するものでもなかったということになる。

これまでの長い研究史のなかでこのことに触れたのは、清水浜臣の『語林類葉』およびさきの玉上評釈であった。だが、あまりにもさりげなかったためか、後続の注釈者の注意を喚起しなかったようである。なぜなのか。想像するに、孤例にたいする抗いようのない魅力、語源説に囚われやすい語学者の性癖、そして同源の「うごめく」で解釈したときの文脈上の自然さ、こういった呪縛が、「をこ（烏滸）めく」の存在を見えなくさせ、河内本帚木巻の「オゴメク」だけがほかの「オコメク」の用例から、ながいあいだ引き離されていたのだと、わたしは思う。そして、河内本が校訂本文の底本に使われなくなって、テキスト作成のさいの検討事項から外された。検討対象にならなかったおかげで、源氏物語のテキストから消えた「オゴメク」が古語辞典では残っているのである。皮肉にも、河内本の価値の下がったことが、古語「オゴメク」を生き延びさせたのであった。

帚木巻の問題箇所は、河内本では「烏滸めきて」である。したがって、平安時代にオゴメクという語は存在しなかった。そして、青表紙本を使う今日のテキストのこの部分も、「うごめく」の意味を誘引したオゴメクが存在しなかったのなら、朝日全書・岩波大系・新潮集成のような解釈と仮名遣は成立しないということになる。

なお、おなじ「烏滸」がおなじ定家仮名遣で表記されたはずなのに、青表紙本と河内本で「おこ」「をこ」と異なっているのは、じつは、定家仮名遣の代表的規準書である行阿著作『仮名文字遣』にこの語が「お」「を」双方に著録されている、つまり定家仮名遣ではどちらとも決めていないところから起こった現象であろう。

しつこいようだが、これをもういちど整理すれば、つぎのようになる。源氏帚木巻の青表紙本「はなのわたりおこつきて」は「鼻をわたり烏滸（をこ）づきて」であり、河内本「はなのわたりをこめきて」は「鼻のわたり烏滸（をこ）めきて」であって、文意はともに、鼻のあたりをおどけて見せて、ばかみたいな様子で、である。そして、「オゴメク」なる語は青表紙本にはもちろん、河内本にも存在しなかった。つまり、平安時代の文献には見られないことばであった。これが、国語史から見たオコヅク・オゴメクおよびオコメクの語誌である。

略称で示した注釈書の書誌（刊年は初版）

朝日全書　日本古典全書（池田亀鑑、朝日新聞社、昭和二一年）
岩波大系　日本古典文学大系（山岸徳平、岩波書店、昭和三三年）
玉上評釈　『源氏物語評釈』（玉上琢弥、角川書店、昭和三九年）
小学館全集　日本古典文学全集（今井源衛ほか、小学館、昭和四五年）
新潮集成　新潮日本古典集成（石田穣二ほか、新潮社、昭和五一年）
岩波新大系　新日本古典文学大系（今西祐一郎ほか、岩波書店、平成五年）

［付記］本稿の一部は、前稿「式亭三馬読本の江戸語――『阿古義物語』に関して」（『国語論究』第一二集所収）で触れたところがあるが、論集の企画の性格上、本稿で論証したかった内容には立ち入れなかった。だが、前稿の意図をはっきりさせるためにはまず、源氏物語の語誌を国語史の視点から把握しなければならない。本稿はそのために草したものであり、両々相俟って源氏物語「オコヅク」「オゴメク」の語誌（史）を述べるものである。

なお、近年、大谷伊都子に、「をこ」に関する一連の国語史的研究がある。とくに「「おこづく」について――「をこ」との関連性から」（『梅花短大国語国文』九号、平成八年一〇月）は、本稿と相重なるところもないではない。が、「オコヅク」＝「烏滸づく」をなかば自明として出発する本稿においては、その等式の妥当性を考察する大谷論文との接点がなく、それに触れる機会は、結局、稿中になかった。先行研究の存在を明記し、教示にあずかったことをここに記しとどめておく。「仮名遣」については、大野晋「仮名遣の起源について」（『語学と文学の間』所収）および迫野虔徳「仮名遣の問題」（『語文研究』三九・四〇号）に多くを負っているが、わたしの理解不足のあることをおそれる。

（しらいし　よしお・文部科学省主任教科書調査官）